文学研究科
２０１８年度
論文名　『平安朝の歳時と文学』
氏名　北山円正

本書は、平安朝の年中行事の創始・変遷、その内容、文学との関わり等々について、それぞれの行事を取り上げて論述したものである。その行事は宮廷や貴族社会において行われており、宮廷・貴族社会にとって重要な意義を持つ、一年のある一日の催しでありかつ風習であった。たとえば重陽節会は、菊花と結びついて無病息災や長寿を祈る一面があったが、それ以上に重要なこととして、多数の官人が紫宸殿や前庭に会して、身分秩序を確認し、さらに天皇の恩恵を実感するための催しでもあった。もちろん年中行事は、それだけではなく、季節の風物とも結びついており、生活に彩りを添える節目ともなった。その一例を挙げれば、端午節会では、延命長寿を期して色彩豊かな薬玉を下賜する儀礼があり、騎射・走馬が行われる。このほか、宮廷の殿舎や貴族の邸宅の屋根に菖蒲を葺いて、鮮やかな色や香りを漂わせる、華やいだ特別な一日とした。

平安朝の行事は、史書・古記録・儀式書や文学作品等々に、さまざまな文献に記され残っている。本書では、とくに文学においてどう描かれているか、またそれを描いてどのような思いを託そうとしているかを考えようとした。そうしてその特徴を明らかにするために、本書を、「第一部　菅原氏と年中行事」「第二部　年中行事の変遷」「第三部　歳時と文学」に分かち、各部の中で問題となる点を取り上げて、どのような変遷を辿り、どのような意義を宮廷や貴族社会において持つのか、その時の風物とどう関わっているのか等々を検討した。

本論文の研究方法を述べておきたい。これまでの年中行事研究は、史書・古記録・儀式書を資料とし、その記述を読み解くことを中心に推し進めてきたと言えよう。そしてその上で、補足として平安朝の仮名文学作品等に、どう行事が描かれているかについて言及するという形であったように見受ける。じつはこれだけでは、資料としては不十分である。従来漢詩文の作品を取り上げることがほとんどなかったという状況があり、そのために明らかにならなかった点がかなりある。取り上げて読むべき資料のうち、漢詩文の占める割合はかなり高い。この中から拾い上げることのできる知見や問題点は数多くある。残念ながら現在の文学・史学等の研究において、漢詩文を主要な資料として評価することがあまりない。その原因の一つとして、漢詩文の注釈が行き届かず、読解が難しいという点を指摘できるだろう。そのため本書では漢詩文の読解に努め、その上での論究に努めた。

また、漢詩文を読解するにあたって必ず取り組まねばならない課題として、中国文化・文学受容の究明がある。これについても、十分な研究成果が備わっているとは言いがたい状況がある。近年中国の文化・文学が平安朝文学にどれほどの影響を与えたか、どの程度摂取したかといった研究が盛んになって、進展のきざしがあるものの、まだこれからも取

り組んで行かねばならない。よって本書は、とくに中国文化・文学享受の実態についても、さまざまな分野に目配せしつつ資料を読解し、問題点に取り組んだ。以下各部の内容について述べる。

第一部「菅原氏と年中行事」は、菅原氏およびその私塾である菅家廊下が、平安中期の年中行事形成において果たした役割について述べている。そもそも宇多朝つまり寛平期は、平安朝年中行事における一つの画期であり、その後の年中行事のあり方を決定する側面を持つ。たとえば、正月の子の日の行事は、この期に宇多天皇が野遊したことによって一気に認知され、貴族社会に広まる。またそれだけにとどまらず、風趣に富む遊びとして定着する契機となったようである。三月三日について言えば、この期に、平城天皇の大同期に停廃した行事を復活しており、再び注目されるところとなった。ただし節会としてではなく、興趣あふれる小宴―詩会が中心の催し―として催されたのである。以後和歌も含めた文学創作の場として機能することが多くなって行く。これらの年中行事の新たな展開は、その多くが宇多天皇の主導によるものと考えられる。

その天皇の意向に沿いながら、年中行事の変革に寄与したのが菅原道真である。寛平期に始まった九月尽日と八月十五夜の宴にそれを見ることができる。この二つの宴は、すでに菅家廊下で開いていた詩宴を宮廷に持ち込んでいる。官人養成のために菅原氏が経営していたこの塾は、門下生が日頃の研鑽の成果を発揮するために、この日に催していた。八月十五夜の詩は、中唐の詩人白居易とその仲間がはじめて詠んだようである。白詩享受が盛んな風潮の中、その詩趣を認めた是善・道真父子が私塾に採り入れたのであった。ところが、是善が元慶四年八月三十日に薨じた。以後八月は家忌の月となるため、停廃しなければならない。これに対応するべく道真は、白居易独自の詠作と言うべき三月尽日の惜春の詩情を応用して、九月尽日における惜秋の風趣を生み出し、私塾での詩宴の題材としたのであった。やがて道真が宇多天皇の側近として重用されるに及んで、この菅家の二行事は、宮廷の詩宴に採り入れられるに到る。一私塾で催していた九月尽日と八月十五夜の詩宴が、宮廷に持ち込まれるような事態は極めて稀であり、それだけに道真の果たした役割は大きかったと言えよう。また、行事を創始する契機となった、白詩の及ぼした文学･文化への絶大な影響力にも着目する必要がある。

菅家廊下は是善の時代には開いており、八月十五夜の詩宴は催されていた。したがって新たな年中行事の端緒は是善の頃には萌していたのである。とかく道真に耳目が集まるのであるが、是善の働きは、宮廷での九月尽日と八月十五夜の宴を検討する上では見逃すべきではない。道真はこの父の足跡を継承するとともに、進展させたと言えよう（以上「１　菅原氏と年中行事―寒食・八月十五夜・九月尽―」「２　是善から道真へ―菅原氏の年中行事―」「４　菅原道真と九月尽日の宴」）。

寛平期には、正月十五日・三月三日……などの行事と食との関連について、宇多天皇が関心を向けている。従前の年中行事ではあまり見られない傾向である。これは中国の宮廷

で給せられていた節食に倣おうとしたためであろうと思われる。ただそれだけでもなく、日本の民間での食を持ち込んだと思しきところもあり、その食の背景や経緯は単純ではない。道真は、正月の子の日における羹を食べる風習が、どういう所から始まったかについて言及しており、宇多天皇と同様に目を向けている。このような動きが宮廷行事に新しさを加えるきっかけとなったようである（「３　寛平期の年中行事の一面」）。

菅原氏やその一員である道真は、中国文学・文化を学んで、その成果をもとに年中行事を取り入れて新たな行事を生み出した。そしてその行事を定着させ、やがて宮廷行事にまで展開させる。その後、その行事は長く引き継がれ、文学作品にも描かれた。なお、中国文学とりわけ白居易の詩文は、平安朝年中行事の形成に当たって重要な役割を果たしている。それは、菅家一門の熱心な学習の成果であり、当時の文人のほとんどが、白詩を摂取するという背景があったためであろう。その上で、道真らの行事が受け入れられたという側面もあったのである。

第二部「年中行事の変遷」は、子の日の宴を始めとする四つの年中行事を取り上げて、その儀式の性格、儀礼の場、意義、貴族社会･民間における催しの様態等々を、平安朝以前から辿って述べたものである。時間の経過とともに、儀式儀礼の中身は変化するものであり、その様相は、史書・儀式書・文学作品等々によって知ることができる。文学作品も重要な資料であり、史書等には記さないような情報を提供する場合もある。年中行事の変遷を辿るのは、史上の事実を確認することにほかならないが、あたう限り幅広く資料を読むことが肝要である。

まず一例として九月九日の宴すなわち重陽節会を挙げてみたい（「４　重陽節会の変遷―節会の詔勅・奏類をめぐって―」）。天武天皇の十四年にこの宴を催した後長く途絶し、桓武天皇の代にまで下って再興の機運が醸成され、九月九日およびその前後に遊猟や小宴を行っていた。そして、平城天皇の大同二年に到って、九月九日は、「菊花の豊楽聞こし食す」日であると、詔に明言して観射・宴等を催す。宴の復活である。その後、嵯峨天皇の弘仁三年になって節会となり、儀式としての格を上げる。ところがこの節会は、国庫を圧迫する要因の一つとの理由で、しばらく停止される。ただし詩会のみの宴は行っている。やがて淳和天皇の天長八年までにはもとの節会にもどっていた。これ以後も消長をくり返しながら、文字どおり公宴として重んじられ開催されたのである。そして、その後も公宴としてつづいて行くこととなる。

もう一つ子の日について述べておく（「１　子の日の行事の変遷」）。『類聚国史』の歳時部は、六国史に見える各年中行事の記事を、編年で集成しており便利なのだが、奈良時代におけるこの日の行事については、まったく記事が見られない（巻七十二・子日曲宴）。これは、集成のもとになった『日本書紀』『続日本紀』に記事のないことが原因である。そうすると、子の日の行事が当時なかったかどうかが問題となる―『日本書紀』にはなかったようである―。『万葉集』（巻二十・4493）の題詞は、天平宝字二年正月三日（初子）に「玉

箒」「肆宴」を賜り、詩歌を詠ませたと述べている―大伴家持の和歌のみをあげている―。この日は、天皇自ら耕作する親耕と皇后が蚕室を掃う親蚕の儀礼を行っていたのである―この時の「手辛鋤」「目利箒」などが正倉院に蔵せられている―。中国の皇帝とその后が行っていた行事を日本の朝廷に持ち込んだのであった。この行事はすぐに途絶えたようであり、以後の記録には見えない。次にこの日の行事が行われたことが分かるのは、先に引いた『類聚国史』によってである。大同二年以降、「曲宴」（規模の小さい宴）を時折催している。斉衡四年正月二十六日の曲宴については、その内容は「子日態」に倣うとある。子の日の宴として定まった趣旨・次第等があったようだが、その詳細は不明。そして、寛平期に到って宇多天皇は、五年に子の日の宴、八年に子の日の野遊を行っている。前者の模様を、菅原道真が詩序に記し、後者についても紀長谷雄が記録を残している。これ以後、子の日の若菜摘みや小松引きが広がって行く。そして、風趣に富む行事として親しまれ、漢詩文のみならず和歌・物語を始めとする仮名文学作品にも、幅広く現れることとなる。この行事は、幾度かの変化を経て後世に伝えられる。その中で、寛平期におけるこの行事の果たした役割は、大きかったと言えるのではないだろうか。

第二部においてその変遷を辿った行事は、さまざまな要因によってその性格・内容を変化させている。そして、宮廷行事として、また貴族社会および民間の風習として親しまれ定着したのである。変化の様相をみてゆくと、平安朝においては、行事を風雅な趣を重んじる風習へと改めて行こうする傾向がうかがえる。

第三部「歳時と文学」は、個々の行事が文学作品にどう描かれているかを考え、またその中に含む問題を取り上げ、検討した結果を報告した論考である。平安朝の文学作品には必ずといってよいほど、何らかの年中行事を盛り込んでいる。作品に彩りを添えるとともに、そこに作者や登場人物の心情を託すことが多い。時には作品理解・解釈のために重要な手掛かりとなることもあり、忽せにはできない。また文学作品に描かれた行事の模様から、その行事の性格をうかがいうる場合もある。文学は何らかの意図・主題のもとに創作するものであり、そのために表現に腐心するものでもあるだろう。著述に当たっては、過去および同時代の文学作品を参照する場合が多い。第三部では、もっぱら漢詩文作品の享受･影響について言及した。とりわけ中国文学およびその影響をこうむった平安朝の漢詩文を取り上げることが多い。中でも、中唐の詩人白居易の詩文が与えた影響は絶大であり、各作品における詩文摂取の状況を踏まえた上でなければ、第三部の検討は成り立たないと言ってよい。また、取り上げる作品成立以前には、平安朝文人たちが白詩享受によって生み出した詩文が多数あった。言うまでもなく、これら過去の作品が背後にあることも視野に入れなければならない。

まず、平安朝文学ではあまり例のない、屠蘇と白散を飲む風習を描く『土左日記』を取り上げる（「１　『土左日記』の正月行事―「屠蘇・白散」をめぐって―」）。日記の十二月二十九日・元日条に、「ある者」が「白散」を船屋形に挟んでいたために風に吹き飛ばされ、

元日にそれが飲めなくなってしまったという一話がある。「ある者」がなぜそのような愚かなことをしたかというところが問題である。元日から三日間、屠蘇・白散などを服して無病息災を期する風習は、「供御薬」という宮廷行事である。この行事は薬効に期待するだけではなく、春の到来とともに春の気を体内に取り込もうとするところに意義がある。天皇は清涼殿の東向きの場所で東に向かって立ち、東からもたらされる屠蘇酒を飲む。屠蘇は大晦日に宮廷内の井戸に漬けておき、春の若水の気を吸収する。東は春の方角であり、やって来る春の気を我が身に受け入れるのである。日記の中の「ある者」も、元日に春の気を取り込んで、一年の息災を願ったものと思われる。この「供御薬」は、中国伝来の行事であり、宮廷で行われていたものが普及していた様子が明らかになるとともに、この日記の問題点に、一つの解答を提供できたかと思う。作品理解に資するべく検討した結果の一例として挙げておく。

次に、「３　『伊勢物語』の三月尽」と「８　『源氏物語』九月尽―光源氏と空蝉の別れ―」を取り上げる。この二篇はともに白居易の三月尽詩の表現を受容しており、その風情を引き継いでいる。前者の論考で検討した在原業平の和歌は、三月尽詩を取り入れたいち早い例であり、島田忠臣・菅原道真らに先んじて摂取した可能性がある。現存する享受例としては最も古い方である。ただし、業平と同時代に活躍した菅原是善・大江音人ら文人たちに、三月尽の詩が残らないとは言え、摂取していた可能性は十分ある。業平が詠じた三月尽の風情は、もっぱら行く春を愛惜するというものである。次世代の詩人忠臣・道真らが、抱えていた苦悩や悲嘆などとともに詠じるのとは異なっている。白居易が詠むのも、人生におけるさまざまな思いと絡む詩がほとんどである。『伊勢物語』七十七段において、亡くなった人との別れと行く春を惜しむ情趣とを重ね合わせるという表現は、他に類を見ない。業平の学問のあり方とも関わる問題でもあろうか、三月尽における独特の表現を生み出したと言えよう。この日をもって春が終わるという、特別な一日であることが、惜春の情を中心にさまざまな感懐を生み出したと考えられ、業平はその一つを生み出したのである。

後者は、白詩の三月尽の風情を九月尽に置き換えて作り出した詩趣を活かしている、九月尽の詩趣は白居易が生み出したものではない。この創始が菅原道真の腐心によることは、第一部「１　菅原氏と年中行事―寒食・八月十五夜・九月尽―」「４　菅原道真と九月尽日の宴」で述べている。その九月尽における惜秋の情を活かして、夕顔･関屋巻に見える光源氏と空蟬との別れを描き出していることを明らかにした。光源氏にとって空蟬は、どれほど惜しんでも、九月尽日になれば過ぎ去ってしまう秋と同じだったのである。両巻ともに、空蟬は、秋の帰るべき方角である西へ向かっており、光源氏はただ見送るしかなかった。しかもその日は、「秋の暮」「九月晦日」であった。白詩以来の表現を巧みに受け継いでいると言えよう。関屋巻では、逢坂の関で遭遇すると、「今日の御関迎へは、え思ひ棄てたまはじ」と伝えて引き留めようとする。空蟬は関で阻もうとしても通り過ぎてしまう。この表現は白詩にはない独特の表現である。また、空蟬は光源氏がいかに働きかけてもまった

く靡かず去って行く。その点は、いかに哀惜しようとも留まることのない秋と同じである。九月尽詩の表現によって、人物の性格描写に成功している。それまでの九月尽詩の創作や学習の蓄積があって、ここまで到達したのであろう。たんなる白詩受容にとどまらず、そこから展開して、独自の表現を生み出した一例として特筆してよい。

白詩受容という観点から、さらに「9　『古今集』の歳除歌と『白氏文集』」と「11　大江匡衡「除夜作」とその周辺」も挙げておきたい。前者は、『古今集』の冬歌に、年の終わりとともに我が身の老いを詠じる和歌のあることに注目し、その出典を白居易の歳除・除夜の詩に求めたものである。中国における歳除詩の変遷を辿ると、白居易に端を発すること、平安前期の詩にもその影響下にあると見られる作のあることなどを指摘し、『古今集』の冬歌の表現へと繋がるであろうと述べた。後者の大江匡衡「除夜作」についても、除夜における感慨は、白居易が除夜に自分の老いを詠じている詩を、踏まえていると述べた。また、老境にある己と、除夜の「殿上」で勤めを果たしているのであろう我が子挙周、つまり老若の対比も、白詩にもとづくことを指摘した。一年の節目における感懐を表現する場合にも、白詩は盛んに用いられている。平安朝文学の表現を豊かにする上で、白詩は大きく貢献したのである。

第三部の論考十一編のうち六篇は、白詩の大きい影響をこうむった作品を取り上げている。言うまでもなく第一部の中の三篇についてもそうである。これは、白詩の詩想・表現・語彙等々をもとにした文学の創作が、盛んに行われていたことの、当然の結果であろうと思う。残る五篇には、白詩とはまったく接点を持たない年中行事や歳時の文学もある。その中の一二を挙げておきたい。「1　『土左日記』の正月行事」はすでに触れた。「2　武智麻呂伝の「釈奠文」―本文批判と『王勃集』受容―」は、奈良時代成立の作品であり、本書の書名の範疇にはおさまらない論考である。藤原武智麻呂の伝記（『家伝』所収）には、大学助であった武智麻呂が、慶雲二（七〇五）年の仲春釈奠を催す際に、刀利康嗣に「釈奠文」を書かせたとある。その文章を伝記に引いている。「釈奠文」はこれまで注目されていたが、本文に難があり、十全には読みがたかった。そこで本文校訂および注釈を試みたところ、その過程で、その文章が文体からして祭文であること、祭文創作に当たって『王勃集』のある一文の表現を利用していることが明らかとなった。この残巻が正倉院に蔵せられており、その巻末に「慶雲四年七月廿六日」と記している。同元年に帰国した遣唐使が将来したという。康嗣はいち早くこの書に注目して活かしたことになる。中国の別集受容の実態が明らかになる一例であるとともに、本文批判や注釈の重要性を実感する事例でもある。

次に「10　『躬恒集』の追儺歌」を取り上げる。当時は大晦日に宮廷で実施していた追儺の、儀式としての性格の変化を、凡河内躬恒の和歌を手掛かりにして述べたものである。その変化とは、もともと悪鬼を追い払う役を務めていた方相氏が、群臣等によって追われる立場に変わってしまうことである。躬恒は、方相氏を鬼と見なし、その鬼が「儺の陣」で身を隠すはずの「蓑笠」を脱いでいるではないかと詠じている。この歌は、『躬恒集』中

の延喜十八（９１８）年の歌群に含まれており、これによって儀式の性格の変化は、それ以前に起こっていたことが分かる。私家集という文学作品であっても、時として史実を記録する場合もあったのである。史学は文学も視野に入れるべきであると示唆する例と言えよう。もとよりその逆の場合も忘れるべきではない。

第三部では、平安朝の年中行事および歳時と文学との関わりについて問題点を見出し、検討を行った。主に中国文学受容の観点から、白居易を始めとする詩人らの詩文に注意を払って検討してきた。従来この視点からの研究が手薄であり、問題点に気付かないことが多かったように見受ける。今後この方向からの検討が盛んになることを期待するとともに、自らも取り組まねばならないと考えている。

平安朝は、雅な宮廷文化が花開いた時代であり、国風文化を生み出したとして高い評価を受けていた―国風文化という把握がすでに正確ではなくなっている―。しかし、この時代は、年中行事の一部を見ただけでも分かるように、中国文化・文学の受容がなければ成り立たない。高度な中国文化への憧憬がその摂取を促し、消化翫味して取り込み、自らの文化を育んだのである。本書はその受容の様態を、年中行事の面を中心に検討したに過ぎない。それを作品･資料等を読みながら積み上げてきたつもりである。引用した資料のほとんどが漢詩文であるため、その訓読・注解には意を注いだ。このような基礎作業によって成り立つ研究のあることを伝えたいと思う。

以上